TADOKU JUNIOR　自然のふしぎ神話　★★★☆☆ ふつう　778語

Hermes

ヘルメス

Flora J. Cooke（1895年の本）　原文そのまま　朗読：Linette Geisel

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　風の家で育った赤ちゃんヘルメスは、カメのこうらでがっきを発明し、兄アポロンの白い牛をかくしてしまいます。おこったアポロンは……。



Aeolus was the father of all the winds, great and small.

Long ago, they all lived happily together in a dark cave near the sea.

On holidays, North Wind, South Wind, East Wind and West Wind and their faithful sisters, came home and told of their travels.

The whirlwinds performed their most wonderful feats, and the zephyrs sang their sweetest songs.

These holidays, however, did not come often.

There were no idle children in the family of Æolus.

They swept and dusted the whole world. They carried water over all the earth. They helped push the great ships across the ocean.

The smaller winds scattered the seeds and sprinkled the flowers, and did many other things which you may find out for yourselves.

Indeed, they were so busy that Æolus was often left alone in his dark home for several days at a time.

He was glad when one summer morning a baby came to the cave.

The baby's name was Hermes, but Æolus called him "Little Mischief," because he was so little and so full of tricks.

Zeus was Hermes' father and his mother was the beautiful Queen Maia. She was often called "Star of Spring," because people thought that wherever she stepped flowers sprang from under the snow.

Æolus loved Hermes dearly. He taught him many secrets which only the winds know.

Hermes was a wise baby and understood all that Æolus told him.

When he was only two days old he could run and whistle as well as North Wind.

One day while he was very young he climbed out of his cradle and ran down to the seashore.

There he found an old tortoise shell. He picked it up and put a row of holes along each edge of the shell.

Through these holes he wove some reeds which he found upon the seashore. Then he blew softly upon the reeds.

The birds heard such wonderful music that they stopped to listen. The leaves on the trees began to dance, and nodded to the flowers to keep still.

The waves on the shore caught the tune and have been singing it ever since.

Hermes had invented the lyre and brought a new kind of music into the world. He soon tired of his lyre and went back to his cradle in the cave.

As he lay there he could see a beautiful blue meadow with many white cows upon it.

Hermes knew that the cows belonged to his brother, King Apollo.

“What fun,” thought he, “I will go and make the cows run.”

Off he ran after them until he was tired and out of breath.

Then he drove them all backward into a cave, and fastened them in.

King Apollo soon missed the cows and searched all the meadow for them.

He traced them to the cave, but when he came closer to it, he found that all the tracks led from the opening, not into it.

Near the cave he saw an old man who told him that he had seen the cows.

He said that with them he had seen a baby with wings on his cap and heels.

Apollo knew at once that the baby was his brother, Hermes.

He went straight to the cave of Æolus. There was Hermes in his cradle playing with the shell just like any other baby.

Apollo was angry and commanded him to stop laughing and crowing and tell him where the white cows were.

Hermes only picked up the shell and breathed softly upon it.

Apollo forgot his anger and everything but the beautiful music. He took Hermes in his arms and kissed him and begged him to teach him his secret.

Hermes was glad to be so easily forgiven. He gave Apollo the lyre and taught him many ways to play upon it. Apollo was soon able to make even sweeter music than Hermes, and he afterwards became the god of music.

He was so thankful to Hermes for his gift that he gave him a wonderful rod called the caduceus.

Whatever Hermes touched with the rod became wise, loving and unselfish. One time he saw two hissing serpents about to spring at each other in fury.

He touched them with the caduceus. Instantly they twined themselves lovingly around the rod and never again left it.

Apollo also gave Hermes charge over all the cows in the blue meadow. Hermes loved the cows and often took them with him on his journeys.

He was a wild youth and a great traveler, and so it happens that in nearly all the countries of the world Hermes and his white cows have been seen.

和訳 ヘルメス（Hermes）

アイオロスは、大きな風も小さな風も、すべての風のお父さんでした。

むかし、風たちはみんな、海の近くの暗いほらあなで、なかよくくらしていました。

お休みの日には、北風、南風、東風、西風と、いつもいっしょにはたらくしまいたちが家に帰ってきて、旅の話をしました。

つむじ風たちはとびきりすごいわざを見せ、そよ風たちは一番きれいな歌をうたいました。

でも、こんなお休みの日は、そうたびたびはありませんでした。

アイオロスの家には、なまけている子は1人もいなかったのです。

風たちは、世界じゅうをはいたり、ほこりをはらったりしました。地上のどこにでも、水を運びました。大きな船をおして、海をわたる手つだいをしました。

小さな風たちは、たねをまきちらしたり、花に水をかけたり、ほかにもいろいろなことをしました。それがどんなことか、自分でさがしてみてくださいね。

じっさい、風たちはとてもいそがしかったので、アイオロスは何日も、暗い家にひとりぼっちでいることがよくありました。

ですから、ある夏の朝、ほらあなに赤ちゃんがやってきたときは、とてもうれしく思いました。

赤ちゃんの名前はヘルメスでしたが、アイオロスは「ちびのいたずらっ子」とよびました。とても小さくて、いたずらばかりしていたからです。

ヘルメスのお父さんはゼウスで、お母さんは美しいマイア女王でした。マイアはよく「春の星」とよばれました。マイアが歩くところでは、雪の下から花がさき出ると、人々が思っていたからです。

アイオロスは、ヘルメスをとてもかわいがりました。風だけが知っているたくさんのひみつを、ヘルメスに教えました。

ヘルメスはかしこい赤ちゃんで、アイオロスの話すことを何でもわかりました。

生まれてたった2日で、北風と同じくらいうまく走ったり、口ぶえをふいたりできました。

ある日、まだとても小さいころ、ヘルメスはゆりかごからはい出して、海べへ走っていきました。

そこで、古いカメのこうらを見つけました。ヘルメスはそれをひろうと、こうらの両がわのふちにそって、あなを1列ずつあけました。

そのあなに、海べで見つけたアシのくきをあみこみました。それから、アシにそっと息をふきかけました。

鳥たちは、それはすばらしい音楽を聞いて、立ち止まって耳をすましました。木の葉はおどりだし、花たちには「じっとしていてね」とうなずきました。

海べの波はそのメロディーをおぼえて、それからずっと、うたいつづけています。

ヘルメスはたてごと（リラ）を発明して、新しい音楽をこの世にもたらしたのです。でも、ヘルメスはすぐにたてごとにあきて、ほらあなのゆりかごにもどりました。

そこに横になっていると、白い牛がたくさんいる、美しい青い野原が見えました。

ヘルメスは、その牛が兄のアポロン王のものだと知っていました。

「おもしろいぞ。牛たちを走らせてやろう」とヘルメスは思いました。

ヘルメスは、つかれて息が切れるまで、牛を追いかけて走り回りました。

それから、牛をみんな後ろ向きにほらあなへ追いこんで、とじこめました。

アポロン王はまもなく牛がいないことに気づいて、野原じゅうをさがしました。

足あとをたどってほらあなまで来ましたが、近づいてみると、足あとはみんな入り口から出ていく向きで、中へ入っていく向きではありませんでした。

ほらあなの近くで、アポロンはおじいさんに会いました。おじいさんは、牛を見たと言いました。

牛といっしょに、ぼうしとかかとにつばさのある赤ちゃんを見た、とも言いました。

アポロンは、その赤ちゃんが弟のヘルメスだと、すぐにわかりました。

アポロンは、まっすぐアイオロスのほらあなへ行きました。そこでは、ヘルメスがゆりかごの中で、ほかの赤ちゃんと同じように、こうらで遊んでいました。

アポロンはおこって、わらったりはしゃいだりするのをやめて、白い牛がどこにいるのか言いなさい、とめいじました。

ヘルメスは、こうらを手にとって、そっと息をふきかけただけでした。

アポロンは、そのすばらしい音楽に、いかりも、ほかのこともみんなわすれてしまいました。アポロンはヘルメスをだきあげてキスをし、そのひみつを教えてくれとたのみました。

ヘルメスは、こんなにかんたんにゆるしてもらえて、うれしく思いました。ヘルメスはアポロンにたてごとをあげて、いろいろなひき方を教えました。アポロンはまもなく、ヘルメスよりもっときれいな音楽をかなでられるようになり、のちに音楽の神さまになりました。

アポロンはヘルメスのおくり物にとても感しゃして、カドゥケウスというふしぎなつえをあげました。

ヘルメスがこのつえでふれたものは、何でも、かしこく、やさしく、自分のことよりほかの人を思うようになりました。あるとき、ヘルメスは、シューシューと音を立てる2ひきのヘビが、いまにもおこっておそいかかり合おうとしているのを見ました。

ヘルメスは、カドゥケウスでヘビたちにふれました。するとたちまち、ヘビたちはなかよくつえにまきつき、二度とはなれませんでした。

アポロンはまた、青い野原の牛たちすべての世話も、ヘルメスにまかせました。ヘルメスは牛が大すきで、旅に出るときは、よく牛をつれていきました。

ヘルメスはじっとしていないわかもので、たいへんな旅人でした。だから、世界のほとんどすべての国で、ヘルメスと白い牛たちが見られてきたのです。

たんご と クイズ ヘルメス

winds 風	cave ほらあな	ships 船
seeds たね	cradle ゆりかご	tortoise カメ
cows 牛	serpents ヘビ	

Q1 ヘルメスがたてごとを作るのに使ったものは？

① 木のえだ　② カメのこうら　③ 貝がら

Q2 足あとがほらあなから出ていく向きだったのはなぜ？

① 牛が自分で出ていったから　② ヘルメスが牛を後ろ向きに追いこんだから

③ アポロンが見まちがえたから

Q3 アポロンがヘルメスにあげたふしぎなつえの名前は？

① カドゥケウス　② トライデント　③ エクスカリバー

こたえ

Q1 ②　ヘルメスは海べで古いカメのこうらを見つけ、ふちにあなをあけてアシをあみこみ、たてごとを作りました。

Q2 ②　ヘルメスは牛をみんな後ろ向きにほらあなへ追いこんだので、足あとは出ていく向きについていたのです。

Q3 ①　アポロンはたてごとのお礼に、カドゥケウスというつえをあげました。ふれたものはかしこく、やさしくなります。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #30800（Flora J. Cooke、1895年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Linette Geisel（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。